

(国分市上小川新城)

位置と環境

城山山頂遺跡は、国分平野の東端中央部に突出した標高192.6mの山塊の頂上平坦部に位置し、大隅国の中枢部であった国分平野を一望の下に見渡すことができる天然の要害上に立地した遺跡である。

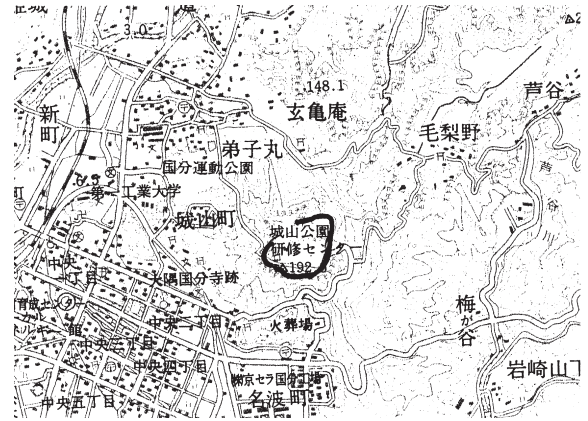
調査の経緯

国分市は昭和49年度から都市公園建設事業を起し、五か年計画で13.1haの城山公園の建設を進めた。当該地域が周知の遺跡であることから、県教育委員会と協議して、範囲確認及び発掘調査を実施した。

調査は、国分市教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力を得て、昭和51年度から昭和53年度にかけて実施した(第2図)。

遺構と遺物

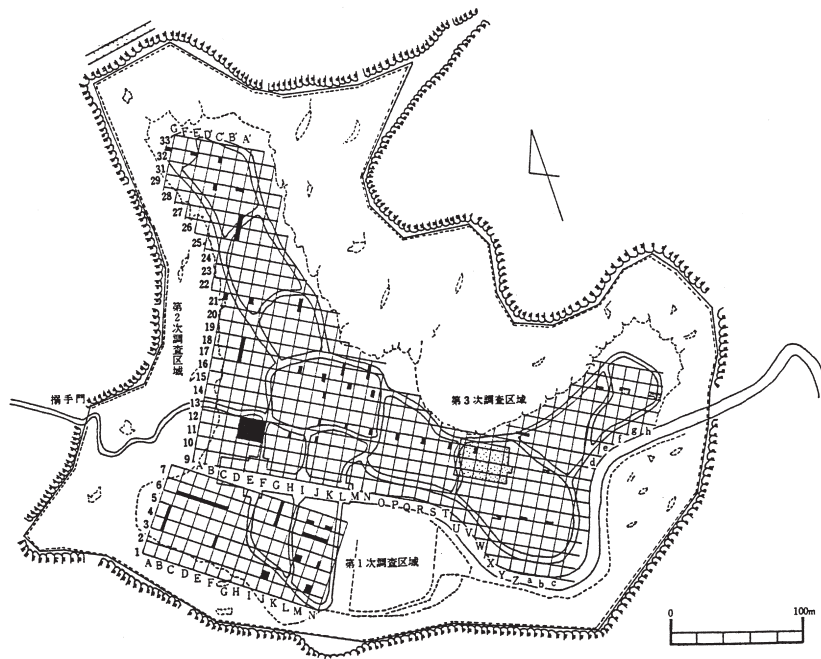
第1次(昭和51年度)調査では、奈良・平安時代の土師器・須恵器片が出土したが、ほとんどが耕作土や攪乱層の中から出土した。また、Ⅲ層上部から古墳時代の成川式土器を主とする遺物包含層が残っており、しかも完形品が密集していることから、住居跡の存在を推定できた。Ⅴ層からは縄文時代前期の前平式土器片が出土した。



第1図 城山山頂遺跡の位置

第2次(昭和52年度)調査では、住居跡群と数多くの柱穴群を検出した。掘り下げを進めた住居跡のうち7軒の埋土中から布留式土器片・成川式土器片が出土した。5世紀初頭の布留式土器の出土例は本県では初めてである。(第5・6図) また、柱穴と思われるピットを152基検出したが、その埋土の色調に差が見られ4期に分けることができた。

第3次(昭和53年度)調査では、成川式土器を伴う住居跡43軒(円形竪穴1, 方形竪穴42)を検出した。(第3図) 数多くの切り合い関係がみられる複合遺構で、しかも山城築城時に切り落とされ、完全なものは残存していなかった。また、径0.8mから10m、深さ約0.6mの円形の掘りこみが住居跡群の



第2図 周辺地形及びトレンチ配置図

そばで3基検出され、炭化米が多く出土した（第4図）。

特徴

主たる遺跡は、①5世紀初めごろのもの、②8世紀初めごろのもの、③16世紀中ごろのもの、の3時期に分けられ、古代から近世を通じて高地性集落あるいは山城として、それぞれの役割を果たしてきた古来天然の要害である。

また、畿内の布留式土器と在地の成川式土器が相伴したことは、当時すでに近畿の人々が当地域と関わりがあったことがわかる。これは記紀に書かれている「クマソ」に関係のあるものと考えられ、貴重である。

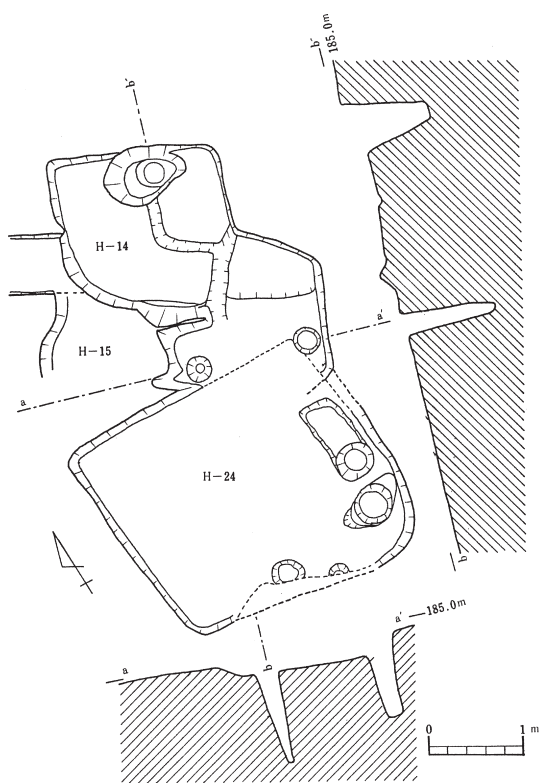
資料の所在

出土遺物は、国分市郷土館に収蔵・展示されている。

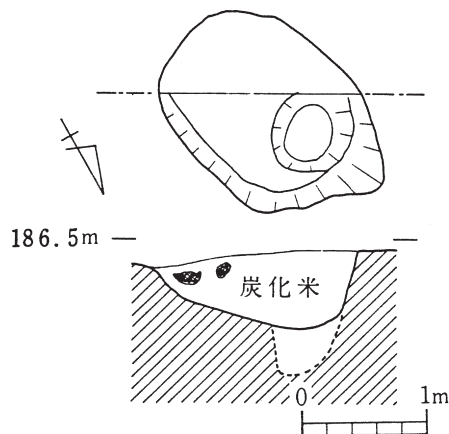
参考文献

国分市教育委員会1985「城山山頂遺跡」『国分市埋蔵文化財調査報告書』2

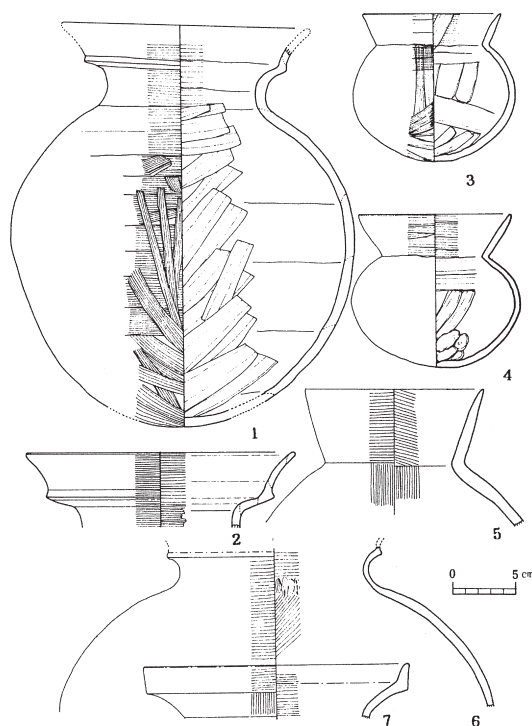
(鈴木順一)



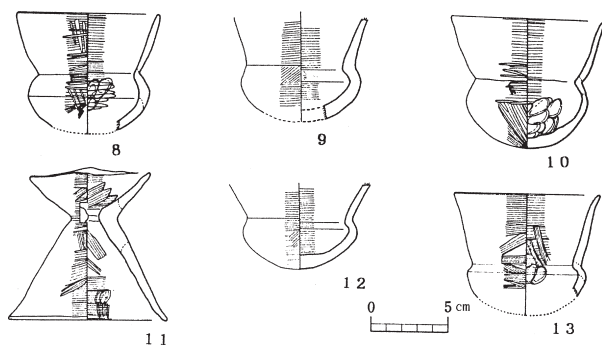
第3図 14,15,24号住居跡



第4図 貯蔵穴



第5図 土師器(壺)



第6図 土師器(壺)